

浄土

十月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三號郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別快車郵便第三五二号)
昭和三十九年九月二十五日 印刷 昭和三十九年十月一日發行

第三十卷

第十号

表紙の解説

菩提樹（仏陀）を礼拝する人々

サীনチ

首都デリーから南へ一夜を車中ですごすと鉄道の傍に、大ストウーバ（塔）で名高いサীনチの丘があります、このあたりは周囲一面ゴッゴツとした岩山でまことに段々風景な所ですが、西暦前後にはすぐ北のビールサと共にかなり盛っていた地方です、サীনチの塔は、大小三塔が建っています、最も古いものは西暦前一世紀、四つの門の残っている、有名な大塔は、少し遅れて建てられました、御多分にもれず、この仏教遺跡も長らく廢墟となっていました、今は立派に復興され夜になると満天くまなく星の輝く美しい空の下に静かに立っています。

最初期の仏教芸術には仏像を現わしませんが、ここにあがたサীনチ大塔の門の側面にきざまれた仏陀崇拝の図も、菩提樹と、仏陀の座席で、偉大な師の像を敬愛しています。上方には天人が二人、花の環をささげています。礼拝しているのは在俗の信者の人人で、大きな頭のかざりと腕輪が人目をひきます。

サীনチの四方の門にはこの外、仏陀の生涯や、種々のニビソードが、すきまなくほりつけられ、初期仏教彫刻の素朴な中にも信心の心を見ることが出来ます。

（佐藤良純）

香りたかき浄土トラクト — 既 刊 —

選択集私解	大正大教授 文 博	竹中 信常著	新書版 120 P	価 円 30
真理のはなたば	大正大教授 文 博	佐藤 良智著	新書版	価 円 30
信仰への導き	文 博	佐藤 賢順著	B 6 版 16 P	価 円 10
こ法語 の しおり		村瀬 秀雄著	B 6 版 16 P	価 円 10
浄土宗のおしえ	大正大教授 助 教	宮林 昭彦著	新書版 20 P	価 円 10

念仏をひろめるために心をそそぐ布教家に 多数申込みには
真実の信仰をもとめている檀信徒の方々に 割引いたします

発行所 法然上人鑽仰会 電話 (262) 5944
替 東京 82187

法然上人御法語



表紙 菩提樹を礼拝する人々

随 想 宝田正道・野間三世・河原信三…(2)

お十夜のころ 遠 田 弘 俊…(4)

釜 寺 縁 起 大 村 興 道…(8)

南無阿弥陀仏と云う「ことば」について…福 富 海 岳…(24)

無信仰者の疑問 中 野 尅 子…(26)

— . — . — . — . — . — . — . — . —

東南アジア旅行記..... 佐 藤 行 信…(12)

近 世 文 名 録 塩釜義詮僧正..... 高 橋 良 和…(16)

家康と登誉天室 鶴 田 湛 泉…(18)

茶の湯に
生きた人々 佐河田昌俊..... 林 左 馬 衛…(21)

— . — . — . — . — . — . — . — . —

学会手引 露骨になってきた学会—戦挙戦..... (7)

御法語をいただく..... (32)

— . — . — . — . — . — . — . — . —

信仰の手びき 宮 林 昭 彦…(28)

一粒の蓮の実

宝田 正道

(中央公論、自然編集長)

この間、書棚を整理していたら、古ぼけた小さな紙包みが抽出しの奥から出て来た。開いて見ると大正大学浄土学研究室の封筒に入れた一粒の蓮の実と、一寸四方ほどの黄色っぽい布片であった。表書に「大賀博士より寄贈、五百年前の蓮の実(満洲普蘭店泥炭中より採取)」と蓮絲曼陀羅織地見本とある。

蓮の実は化石のように固く黒光りがして、いかにも古めかしい代物だが、私の記憶は忽ち二十五年の歳月を遡って、大正大学副手時代の想い出を甦らせた。

その頃、大賀一郎博士は、中将姫が蓮糸で織ったと伝えられる大和当麻寺の秘宝当麻曼陀羅に赤外線を当ててその真偽を科学的に究明したことで話題になっていた。博士は、当麻曼陀羅の研究を機縁として仏教に興味を寄せ、恩師望月信亨先生の紹介でわが研究室へも時々来られた。当時、浄土宗史について調

古都の自然

野間 三世

(主婦の京都を守る会)

今秋、みなさんが京の秋を訪ねて京都駅頭に立たれたとき、眼の前に十一階建のビル、その上にそびえる一三一米のなんともグロテスクなタワーをごろんになってタワーブームも遂にきわまったかと慨歎される方も多いことでしょう。このタワーは年初市民の知らぬまに計画され実現され私たちが知ったときは既成事実が作られたあとでそれからはいよいよ、あれよという間に形作られていったのです。一外国人に新聞紙上で指摘されたとはいえ私どもは古都のよさを守るについて決してやぶさかではなくそのあらわれが京都在住の文化人による「京都を愛する会」若人たちの「京都を守る青年会議」婦人層の「主婦の京都を守る会」等によってタワー建設反対運動を始めました。関係方面への建設中止申入れ、街頭署名、講演会、他都市の人びとへのアピール等やがては全国運動に発展させ京都、

中国を訪れて

河原 信三

(善光寺大本願信徒総代)

中共の周総理に招待され、私が故高崎達之助氏のお供をして、経済使節団に加わり、訪中したのは昭和三十七年の晩秋であった。続いて、昨年の第二回目の訪中で、広東、北京、南京、上海など主な都市とその周辺を視察した。

かつて、二十五年前召集を受けて、永く彼の地に駐留していた時、中国の政治、文化、生活、民情、風物などに親炙していただけた。革命後のそれ等の変り方など比較できて頗る興味深かった。わけでも、宗教に対する国家としての考え方や、民衆の宗教性など随分意外に思われる点が多かった。戦争直後、国民政府軍によって泥まみれにされた広大な寺院も数多い仏様も、奇麗に修復されて保存され、僧侶も、国家の給与で小ざっぱりした服装の念仏姿が見られた。そして上海でも、キリスト教会や、東本願寺の建物も、大切に残

へていた私は、理学系の門外漢ですからと謙遜される博士に、西晉聖聰の当麻曼陀羅疏の所在をお教えしたりして親交の栄を得た。そういう関係で、ある時、博士から頂いたのがこの二品であった。蓮の実は二粒だったが、先年その一粒を作家の森田たまさんにさしあげたので、残るこの一粒こそ、忘れがたい記念の実である。布片の方は、博士が当麻曼陀羅の復元を期してわざわざ京都の川島織物に絹糸で試し織りさせられたものの一部で、いずれも貴重な品である。

私は永らくこれらの記念品を蔵い忘れていたわけであるが、さてこの実の処分を、どうしたらいいか。蓮は、インドの古代民俗では女性の生殖力を意味し、多産、神聖、長寿、不死などのシンボルとして仏教とも縁深く、その長命なことは、千葉県草炭地出土の二千年前の種子が見事に開花した事実でも知れよう。だから、咲かせて見たい気もするし、五百年の生命をそのまま保存してやりたい気もある。今や、「ハス博士」として健在な老先生のご意見でも、そのうち伺うつもりである

奈良に対する文化保護都市制への国会請願までもって行きたい念願なのです。すでに他都市にみられない古都の美しさ、祖先の残した大いなる遺産を京都市民のみでなく全国民で守って頂きたいのです。タワーの建設は京都では何の価値もみとめられずただ営利目的のみならば、なにも駅前デパートとすえて見はるかす北山、西山の遠望をさまたげずとも、国鉄新幹線の開通によって工業的に発展しようとする洛南の地にそれにふさわしい設計で建てたらよいのです。そこから望む東、北、西の山なみに囲まれた京の市街は又あらたな眺めかもしれない。駅前という環境に建つタワーは美的概念を損うのみならず悪のたまり場ともなり非行少年問題にも及び附近の小売店への圧迫にもなるのです。私共は単に反対のための反対でなく新しい京都の町づくりとして必要であれば双手をあげて賛成します。古都のもつよさを愛していればこそもう日本には数少ない山紫水明のこの地にふさわしい建物の現れをまつのです。今後この運動に御賛同いただけますならば幸いと存じます。

されて荒らされてはいなかった。十月一日の国慶節には、市内の各家庭を廻って歩いたが、昔ながらの祭祇行事に用いる青赤の貼紙や、飾りはそのまま伝承されていた。案内の役人にきいても、個人の信仰や葬祭礼は干渉していないと語った。共産党の人々の葬儀は、何れも、宗教的色彩をもたないという事であった。だが街で販売される寝棺の如きは、部厚い木で作った従前通りの壮麗なものを許しているところは如何にも「宗教は阿片なり」と、小児病的に弾圧しない大陸的な、大まかな政治が感じられた。しかし、歴史博物館の陳列方法は、どこまでも革命中国式で、孔子や孟子も、ただ一時代の哲学者として紹介してあるにすぎない。が、訪れる中老の人達は敬虔な禱りを捧げているなど、純粋な国民の宗教心を、少しも圧えつけようとしていないところが感銘された。日本の僧侶の方々も七八名ほど国慶節に招待されて、特等席から市民の分列行進を参観しておられるのを見て、この国も年々大人になっているナ、と見て取った。

お十夜のころ

遠田 弘俊

(大本山増上寺布教師)

渋柿を眺めて通る十夜かな。美しく色づいた柿が秋の日指しに輝っているがそれは渋柿である。景色としては申分ないが今頃まで残っている所はやっぱり渋柿だからであるう。

やがて此の柿も一つ残らずもぎ取られて軒先き近く冬の日にさらされる日も近い。渋柿が私達の口に入るまでにはいろいろの過程があるけれど何と言っても吊し柿「ころ柿」となったものが一番美味しいように思われる。勿論「うませ柿」「さわし柿」と言ったものもあるが、真白に粉の吹いたころ柿にまさるものはないであろう。渋柿として木に残っている間は鳥ですらも相手にしないけれど、やがては「み光に摂取せられし柿の味」ともなればその甘さは何に喩えようもない程になる。私達は此の事についてよくよく反省して見たいと思います。浄土の教えは「救いの教」と

言われます。何故でしょう。仏の教えとは申すまでもなく「仏に成るの教え」であり、私達は皆一樣に成仏することになればならぬのです。そのわかり切った事が日々私達の生活の中に生かされて行かなければならないのです。成仏する為には自分で悟ってゆく人と、自分では悟りの道に入ることが出来ないけれど、知らず知らずの間は救われつつ行く人があるわけです。何れにしても行き着く先きは一つである訳です。終着駅は成仏でなければならぬ。私達をよく聞くことですが「目的の為に手段を択ばず」と言いますが、之れは飛んでもないことであって、あくまでも目的の為に手段を択ばねばならぬことが理の当然だと思えます。そこでもう一步進んで成仏とは何であろうかと言うことになれば、之れは又誰も易々と口にする言葉ですが此の成仏程簡単のようで難しいものはない。何が一体成仏であ

り、どんな状態が一体成仏なのか。仏とは覺者だと一口に言いますが、その覺者とは何か。悟れる者だ等と簡単に言つて見ても悟れる者等とは之れ又そうそうさらに有るとは思えない。一応仏らしい人は居るかも知れぬ。然し眞の仏は既に釈尊一仏であるとするならば現實に見て今現に吾仏なりと言ひ切る人は果して有り得るでしょうか。此の事が大きなポイントだと思ふのです。無量寿經の中に「正心意にして齊戒清淨なること一日一夜すれば無量寿國に在つて善を爲すこと百歳するに勝れたり、ゆえはいかに彼の仏の國土は無爲自然にしてみな衆善を積みて毛髮の惡なし、此に於いて善を修むること十日十夜すれば他方諸仏の國土に於いて善を爲すこと千歳するに勝れたり、ゆえはいかに他方の仏國は善を爲す者は多く惡を爲す者は少し。福德自然にして造惡なき地なり」とある。仏があると言ふことは仏のある國土がなければならぬ。私が仏になることは仏の國土成就することではなければならぬ。ところが私達の理想は一応そこにおかれてゐるわけではありませんが、それならばその理想の實現は一体何時成就出来るのであろうか。

經に説かれてゐるように、此の土に於いて善を修すること一日一夜すること無量壽國（阿彌陀佛國）に在つて善を爲すこと万歳と言ふことだから、如何に此の世で善を行う

ことが難しいかと言ふことになるわけです。此の事が所謂環境の淨化と言ふような言葉で言い表わしてありますが、私達が自らの環境に依つて如何に日常生活に大きな影響があるかと言ふことに氣付くのであります。人の性は善なりと言ひますし、又悉有仏性等の言葉のように、決して本來惡の固りだと言つたような考へではないのですが、そうした者がどうして惡の道に入つて行くのか、而も善を修すること難しいのか、此處に大きな矛盾を感じずには居られない。本來持つてゐる性そのものが善なのだから善にあこがれる本質的なものがなければならぬ筈であるわけです。それにも拘わらず私達は惡への道をひた走るのは何故でしょう。よくよく考へて見ますと、人間本來の持つてゐる本性には善も惡もない無色透明なものだが、此の世は常に相對的なものであり、個では生きて行かれぬものである。如何なるものと言へども現實の存在は必ず縁に依つて存在することは明かです。その縁なるものにも恐らく善とか惡とかと言つた道德的なものはないわけです。

それなのに私達は常に最高の善とか最低の惡とか言つて、之れを規定するのは何に因るのでしょう。言ふまでもなく人間社會の構成であり、私の住む環境に依つて起る道德的基盤であると言わねばなりません。して見るならば誰

もが一樣に住んでいる社会であり、みんなが生活して行かねばならない地域であるのだから自然のままに夜が明ければ働き、日が暮れば休息する。そして誰もが同じように楽しい一日が送られるとすれば決して悪もなければ罪もなく、それこそ無為涅槃の世界である。然しそう簡単に世の中はゆかぬ。何故此の土に於いて善を修すること難きか。言うまでもなく私達に人間智があり、その智に依って欲求を起すと言う恐るべき性格を持っているのです。私は此の人間智こそやがては人間を滅することになるかも知れぬと思うのです。

マンモスの牙はマンモスを亡ぼした如くに。勿論さればとて今日明日にどうなるものでもないでしょう。そうした地域環境をどうして仏国土に近づけなければならぬか、如何にしたならば此の土に仏国らしいものが出現するか。それは恐らく人間智である限り難中之難、無過此難であると思われる。そこでどうしてもその難しいことを何とかせねばならない。手を拱ねて見ただけではならない。此処に思いを致す時始めて古来の先哲賢人が残された足跡がただならぬ大きなものであることに気付くわけであります。

私達浄土の教え、特に元祖大師法然上人の流れを戴くも

のにとって深く前述のことを反省してみなければなりません。此の事がほんとうに自覚出来る時に初めて本来の姿に到達出来て、法蔵菩薩の誓願が判っきりと頂けるのではないかと思います。私達が人間智にとらわれている限り永遠に救われてはゆけぬ。法然上人が何故に悟りの道をさしおいて、救いの道を選び取られたのでしょうか。何故に弥陀一仏に帰せられて他を一応御遠慮申されているのか。この事に就いては私が此処でくどくどと述べようとは思わない。何としても私達は仏になる為、仏になることが往生の最終目的であり、往生することは還来することであり、往相還相がやがて浄仏国土成就衆生の大目的の完遂にあることを「救いの道」を辿る私達浄土教信者の信念でありたいと思います。念仏するもの、一念一念に一度の往生が当ておき給うの心こそ私達の喜びであり、弥陀本願の喜びでなければならぬと思います。

南無阿弥陀仏すること、そこにこそ私達が往き着く大目的のあることを自覚させて頂くものです。お十夜に因んで仏恩に報謝すると共に、愈々信根の培養に精進したいものと思う次第です。

(総本山知恩院輪番室にて)

露骨になつてきた学会——選挙戦

衆議院に進出を決定した創価学会は、今までのバケ皮をはがして積極的に選挙戦を始めている。週三回の聖教新聞を見ていると、よくこの事が分る。

先般、衆議院出馬を決定した三十人の会員を、全会員に紹介するのが、先ず第一の仕事とあつて、一面全部を使つて、一人づつ紹介を続けている。その紹介ぶりも、天下にこれ程の人材はいないという程に、大げさな紹介で、真面目に読んでいるのが馬鹿々々しくなる。学会に対する大きな功績を述べたのであるが、且つての折伏の闘士などと言っているなどは、何の事はない、暴力を振つての折伏斗争であつたのである。この様にしてふくれ上つた会員を、こんどは、選挙の票として駆使しようというのであるから、全く驚いた事である。

最も露骨に、こうした学会の態度が示され

たのは、八月二十四日行われた八月度本部幹部会での北条浩副理事長の講演である。

たとえば、最近、自民党あたりで小選挙区をどうのこうのといつております。これについては皆さんもすでにご存知のことと思いますが、新聞紙上等には創価学会の「そ」の字も出ておりませんけれど、なんのために小選挙区を提唱するか、その底はいわずとした公明党の前進、すなわち学会から政治家がでるのをいみきうが為に策動しているのであります。

まことに、この発言は、彼等が選挙に対して、どれ程に神経をつかつているかが分るであらう。こちらから言わせれば、政治もろくに知らない学会人に政治を握られてたまるものではない。政治家もようやく、学会の何であるかが分つたと言えよう。

更に、講演では次の如く述べられている。

公明党の前進をはばむために小選挙区制を強引に押し通すようなことがあつたらば、どうですか皆さん、伝家の宝刀を抜いて見事なる、いまだかつてなかった大衆運動、大デモ行進をやつて息の根を止めようではありませんか。

一体これでは、労働運動バリな行為ではないか。そして、これが宝刀であるならば、学会の本当のものが、そこにあつたという外ないであらう。やるならやつたらよいであらう。世間も始めて学会の本当の姿を見て、めざめるに違いない。

最近、茨城県の仏青で、若い信徒を集めての結集が行われた。本当に仏教を知ってもらい。信ずる立場において檀徒として活動してもらおうという為である。当り前の事であるが、これが今まで行われていない為に、こうした学会を進出せしめているのである。とも角、こうした地道な努力が、今こそ為さるべき時なのである。

学会の実態を見極めることと、自ら実践することとの、この両車輪をいつも廻さねばならない。

起縁寺釜

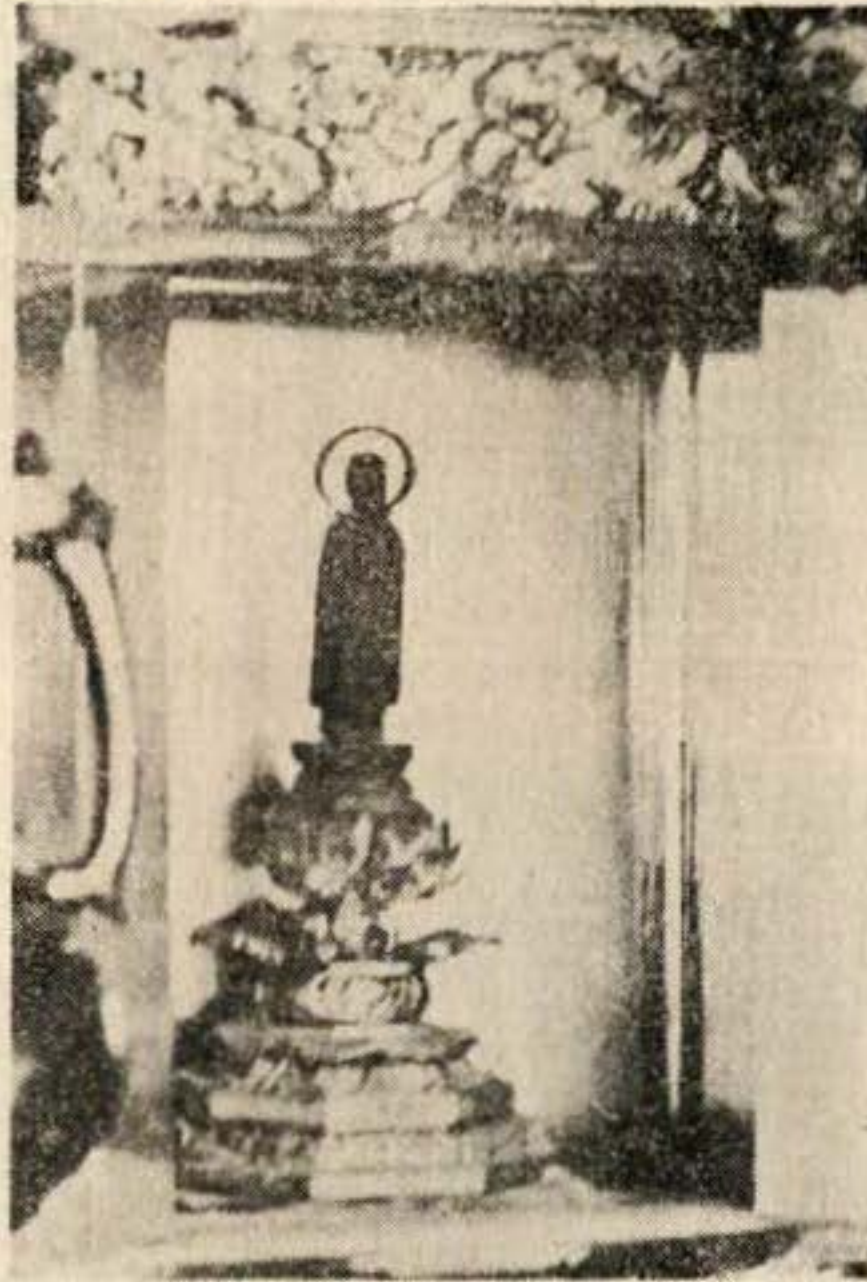
道 興 村 大

(東京学芸大助教授)

元祿十四年に当山の住職であつて、また目黒祐天寺の住職でもあつた祐梵上人という方が彫り遺した由緒書きの版本によると、「釜寺に安置し奉る身代り地藏菩薩の由来をたずぬるに、今は昔、世は挙げて血なまぐさい戦国の時、あの名高い厨子王丸安寿姫が肌身離さず持っていた守り本尊たる小さい地藏尊の木像こそ釜寺の地藏である。江戸の初め頃、西国備前の高僧願誉一安上人と申す方が地藏尊像を背負つてはるばる関東へ行脚して下だり、たまたま当所大宮八幡宮社に脚を留めて参籠し、この尊像を奉安して日々の供養を怠らなかつた。(当時この八幡宮は神仏混淆で大宮寺と称し、近県に稀れな大寺であつた。)一安上人はこの地藏尊の靈驗あらたかなくさぐさの物語りを人々に告げたところ、忽ち近郷近在にその名がひろまり、参詣して利益を受ける者の信仰と礼拝は世の語り草となつた。その頃この方南にも信者が日増しにふえ、中でも方南に大地主鈴木伊兵衛という者有つて信心深く、大宮寺に日参してこの身代り地藏尊の功德に浴し、大いに喜んで自分の家屋敷一切を供養して寺に造り変え、ここにその地藏菩薩の尊像を迎え、一安上人を開山として念仏堂と号した。これが釜寺のはじめである。爾来、武州方南釜寺の名は江戸近郊の名所の一つとなり、少くとも北は田無青梅より南は馬込六郷辺りに至るまで知らぬ人となかつた。釜寺

の通称は、本堂の屋上に大きな釜がのせてあることから起った。さてその因縁は厨子王丸と姉の安寿姫が人買いにかどわかされて、母や侍女と別れ別れになり丹後の由良の浜の山椒太夫という豪族の家に奴として買われ、昼は野良仕事や山仕事に追い立てられ、夜になると二人抱き合って泣き暮らし、死のうとしたことも一再ではな

かった。其の他色々残酷な仕打ちで殺されるような目にも幾度か遭って来たが、いつも地藏尊を念じては色々な靈驗を受けて危難をのがれた。ところが或る日、厨子王丸がほかの奴の見せしめにと大釜の熱湯の中に投げ込まれた時、いずかたからともなく一人の坊さんが現われて厨子王丸を抱き上げて姿を消した。」これは日夜肌身離さぬ御守りのお地藏さんにちがいない。これを因縁として方南念仏堂の屋上に大釜をのせて象徴とした。」と寺伝として伝えられている。惜しいことには、第二次大戦の空襲で寺坊の炎上と共にその版木も焼失して仕舞った。寺は創建以来三百有余年一日の如く今に伝わり、明治



(像 尊 蔵 地 寺 釜)

初年までは毎月四日と二十三日には縁日が行われ、門の内外にぼろ市が立ち参詣する人々も多かった。その後、住職に不徳の者出で、寺の宝物等失われ寺は荒廃、果てはいずこへか出奔して行方知れずになったこともあって寺は衰運に傾いたが、信仰厚い方南の人々の護持によって細々ながらようやくその形態を保っていた。

ところが幸い、大正十一年東京入谷の東運寺を合併し、本堂庫裡山門集会所等百坪以上の殿堂を新築し、ここに念仏山東運寺とし精養桂巖上人を中興開山として釜寺は再び世に生き一層有名になり、身代り地藏尊の御影のうつしや御守りを頂きに來る人も昔の如く、寺の前のバス停留所は方南町釜寺と呼び、街も店が多く立ち並び賑やかになった。現在は身代り地藏尊の御分身が一夜一泊結縁御供養の御巡行に出でいて、春秋四月と十月の二十三日に最後のお宿からの「送り込み法要」行列帰山の行事が続けられている。

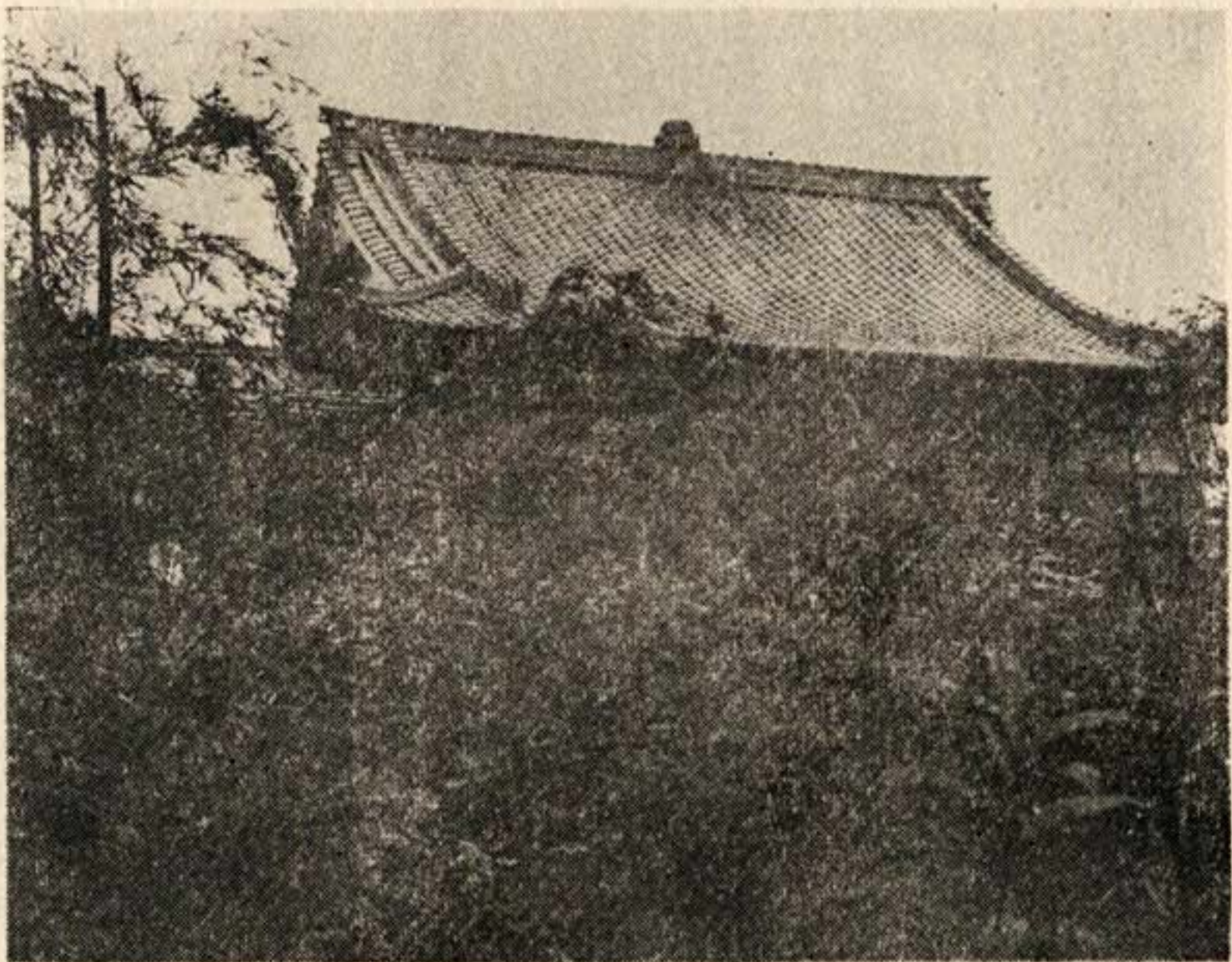
境内には昼なお暗いまでに大小百数十の樹木が林立し、う

っそうとしていたのも悉く戦争で焼け失せて、唯だ四抱えもある銀杏の大木一本のみが三百有余年の歴史を証して今なお屋上の釜と共に釜寺の目じるしとなっている。(この銀杏は戦災で木質部が脆くなったので、災害防止の為屋根の高さで切ったが、その年輪は二百五十までははっきりと数えられる)この身代り地藏尊像は本尊仏前阿弥陀如来像並に薬師如来像と共に先師桂巖上人の決死的搬出によって焼失をまぬがれた。

はからずも篤信の前川喜作氏が「是非本堂をお建て下さい。その費用は私がお持ちしましょう。ただお檀家の手前、私一人で建てたとあつては相済まぬことですから、御援助とすることに致しましょう」として百万円を御喜捨下さった。これをゆかりに早速総代三名(後の杉並区議会議長鈴木睦清氏、素封家三枝仙太郎氏、証券業塚元文弥氏)発起し、檀信徒またよく協力一心、昭和三十八年再建落慶したのが現在の本堂である。以上は先師桂巖上人の書き遺しによる。

お地藏さんの御仏体は木像三寸一分(二〇、二釐)、仏師の作ではなく誰方が高僧(少くも鎌倉以前)の御作で相当古いものとの鑑定である。

山門は三井総本家の御当主三井八郎右衛門氏が本堂再建の折に寄進せられたもの、これは総本家が明治末年に、京都の



(釜寺本堂全景)

お屋敷にあった織田有樂齋愛用の茶室を東京麻布に移した時、その茶室の表門として手に入れ、貴紳墨客をお通ししたが、その後殆んど使用せず三井家では「開けずの門」と称していた由、この門は田村右京太夫の芝田村屋敷の浅野内匠頭ゆかりの脇門にして、内匠頭並にその之にしに繋がる人々の冥福を祈り供養することが出来れば、表門に御使用願いたいとお言葉で奉納されたもの、樺柱に檜作り、屋根瓦は当初のものと明治末年の三井家のものと現在のものとの三種を用いて復元したもので江戸初期の武家門として貴重な文化財である。

屋上の釜は元のは戦災で焼け落ち砕け、現在のは鈴木睦清氏重代の釜で米一俵を炊き得、昔当地方天災饑饉の折の炊き出し用に使われた釜で、釜寺の意義にふさわしいようにとて寄進された。

お厨子は元のは、不釣合いな程豪華なものであった。現在のは三枝仙太郎氏奉納によるものである。

適々今年のお盆の十三日に、古くから当山にあった喚鐘が世田谷粕谷町の消防団長倉本氏から送り届けられた。これは戦時供出したものであったが、無事に今日しかもお盆の十三日に返って来るとは奇しき因縁と云わざるを得ない。その銘に、

南無西方極樂世界大慈大悲阿彌陀仏

奉_ニ寄進_一半鐘者武州多摩之郡方南村於_ニ当院一安仏所_一候
定蓮社正譽幡可和尚中興開基奉_レ寄_ニ進之_一者也 元祿二年十月二十三日

中興開山四世定蓮社正譽幡可和尚

江戸市ヶ谷一丁目

施主 專譽順西

現譽妙全

とあるのを見ると、元祿二年頃に幡可和尚が四世であったこと、この施主が当時の江戸の僧侶であること等から、一安上人の開基の時代もほぼ推測出来、幡可和尚も相当な方であったこと、寺の様子も推し量られて誠に興味深い好資料と云える。

仏大講師 岸覚勇 著

浄土宗義の研究 第二輯

三重県四日市市六呂見町 観音寺中

発行所 記主 禪師 鑽仰 会

振替 名古屋 四〇一二番

A5版 三五〇頁
定価 五〇〇円
送料 九〇円

東南アジア旅行記 (五)

佐藤 行 信

(大正大学講師)

十一月二十三日

本日の予定は、パトナの町を午前中見学である。丁度、ヒンズー教のチャットウと云うお祭りで、ヒンズー教徒が二日間、固型物を口にせず、日の出と共にガンジス河につかって身を浄める日だそうで、早朝六時に起床してガンジス河に見学に行った。我々の泊っているリパブリックホテルからガンジス河迄老若男女の群れが長蛇のように続いている。人力車に乗っているもの、馬車、牛車のもの大部分はそろそろとインド式歩き方と云うか、カネや太鼓をならしながらまるで洪水が流れるような人波である。河につくとそれはまた大変な人である。それにしてもガンジス河の大きいこと湖水のようである。各々家から果物、野菜を持って来、ガンジスの聖水で洗ったりしている。男は上半身裸で水浴してる人が多いが、女の人は着ているサリーのまま水浴しているがあと着替えて帰るそうである。三十分程見学し、いったん、リパブリックホテルに帰り朝食した。ホテルはカルカッタ以来始めて泊り、設備も比較的快適であった。

このパトナは、アシヨカ王がここに都をさだめた町である。朝食後アシヨカ王の旧跡のアシヨカバレスを見学した。アシヨカ王の統治下のパトナ(華氏城)で仏典編集会議が開催された頃当時の仏教僧団の中心地であったことを想いながら、芝生の美しい旧跡を歩いた。そのあとシーク教の寺院を参詣した。ここでは、ターバンをまいておれば勿論よいが、帽子でも何かかぶってないと寺院の中に入れてくれない。最後はハンカチでも頭にのせればよいそうで、参詣の時帽子をとる習慣の我々には、何かとまどった。シーク教とは現在インド、パキスタン両国からなる半島大陸の西北、パンジャブと呼ばれる地方がある。ここの三分の二はパキスタン、三分の一がインド領でこの印度に住んでいるものがシーク教徒であるが、パンジャブとは五つの河の意味である。名前のおり、ケエナブ、サトレシ等、五つの河に源流を發し、気候も比較的涼しく恵まれた地方で、ここに住む人たちは一般に南部、東部の人等より背も高く力も強いそうである。中世に回教が渡ってきたころ、パンジャブの先鋭なヒンズー教徒が

十一月二十四日

本日は、午後二時半、仏陀の聖地、初転法輪の地、サルナートに行くまで自由行動のため、



(ガンシスの水浴・パトナにて)

グルーナラクを教祖として強固な反回教結社を組織したのがシーク教の起源だそうだ。その性格を徹底させるため、回教徒の持たないものを強調する意味から、ちょんまげ、あごひげ、線のついた独特な下着等、特殊な風俗が生れたそうである。片手に剣、片手にコーランで押してくる回教徒と戦うため、つねに刀を帯び相手の刀を受け止める金の輪を腕にはめている。シーク教徒は酒は飲んでもよいが、たばこはいけないそうである。その理由は、酒は士気を高揚するが、たばこは夜間敵に発見されるおそれがあるからだそうだ。教徒になるとすべて姓をシンと称するが、シンとはライオンのことであり、ひげをのばすのも、外ほうをライオンに似せるためだそうだが、教義は回教に対してヒンズー教の純粹性を守ろうとするため、きびしい戒律をもうけている。反面ヒンズー教の欠点に対する真剣な反省をも含めており、偶像崇拜の廃止やカーストによる身分制度反対もその一つである。午

中、アショカ王の旧跡パトナの芸術は、非常によく出来ている感じがした。この午前中のパトナ見学途中、ケネディ大統領が暗殺されたと聞き、始めは、何かの間違ひではないかと思ったが、だんだん聞いてみると本当らしい。これはあとでパトナにいる日本人に聞き本当と判り大変な事になったと思つた。再び昼食にホテルに帰りすこし休み、荷物を仕度して十五時二十分パトナ発の汽車で、モーガルサライに向け出発した。汽車は一等でもあまり快適とはいかなかったが、しかし二車輦は我々の専用になっており、その点、気楽であつた。これから約六時間乗る訳である。ホテルで仕度させた夕食や果物が皆に渡された。皆、車窓よりインドの広大な田園風景を眺めたり、本を読んだり、横になったり、雑談したりで適当にやっていた。二十一時三十分モーガルサライに到着し、ここから車で十一哩、時間にして約四十分でベナレスのクラークスホテルに到着した。このホテルは、なかなか立派なホテルであつた。部屋をきめて貰い部屋にお茶のサービスがあり、風呂に入つて寝たのが十一時半であつた

め、九時に朝食をとり、ホテルに來ている床屋にかかり久しぶりにさっぱりした。そのあと手紙を書いたり、ベットに横になったり休養の半日であつた。このベナレスは、ヒンズ

一教の七つの聖なる都の一つでシヴァ信仰の中心地として、年々インド全土からおびただしい巡礼の人がやって来る。午後二時半にホテルを出発、四台の車に分乗してサルナートに向った。ここからサルナート迄六マイルの道路も、マンゴー樹の並木でなかなかよい路



(アシヨカピーラ・サルナートにて)

て、五人の比丘等に、初めて有名な四諦、八聖道の教えが含まれている転法輪教をお説きになったのがサルナート鹿野苑である。すなわち法輪を転じられたところ、それから仏法僧の三宝がここに完備したこと、こう云う意味で重要な仏跡である。この五人の比丘は、

釈尊の父が、わが子を案じて昔の家臣五人を出家せしめたもので、つまり釈尊をそれとなく保護させたものである。釈尊は六年の苦行もむなしく、ついに苦行をやめて尼連禪河で沐浴し、あまつさえ村の娘から牛乳をもらって飲んだ。これをみた五人の比丘は釈尊堕落せりとみて釈尊を見捨ててサルナートに去ってしまった。一方釈尊は、ブッ

であつた。サルナートは、ここで始めて釈尊が法輪を転ぜられた地である。日本では鹿野苑と云うが伝説によると、昔この地に多数の鹿が住んでおつたので、この名があるそうである。ブッダガヤで悟りを開いた釈尊が、このサルナートまで二五〇軒を歩いてやって来

ダガヤの菩提樹下で、ついに覺りを開かれ、仏陀となられ、自分の覺りを誰に最初に聞かせようかと考えたすえ、自分をすてた五比丘にまず第一に自分の覺りを説き聞かせようと決心し、この地を訪れた。ところが、一方、この五人たとえ釈尊に再会しても、一切相手

になるまいと申し合わせた。しかるにまもなく釈尊がやって来た。五人のものは釈尊の威神に服し仏陀を迎えた。そして転法輪経が説かれると、五人は即座に仏弟子となった。このサルナートには、ダメーク塔と呼ばれている塔がある。この塔は一説には、釈尊が未来像である、弥勒菩薩の出で給う地であると予言された。その場所を記すためだそうだ。百四フィートの高さがあり、周囲は美しい彫り物で取り巻かれている。六、七世紀頃造られたものといわれている。ここも芝生が植えられ、カンナの花が美しい誠によく整備された一大公園であつた。それから、ここにある初転法輪寺は、ムラガンダクチーと云い、ダルマバーラの建立された、マハボデイソサエティ(大菩提会)の寺である。なかなか明るい感じの寺である。寺の正面入口には、日本仏教界からおくつたと云う梵鐘が吊つてある。又、本堂内の壁画は、野生司香雪画伯が描いたものである。堂内の仏像の前で、一同読経礼拝した。そのあと大菩提会のセイロンのお坊さんが、特にわれわれのため、仏舍利をまじかに拝ませてくれ、団員一人一人の頭にい

ただかせてくれた。それからここにある博物館を見学した。アシヨカ王が自分が仏教によって国をおさめる牌文を方々につくったが、このサルナートの博物館のが完全であり、この四つのライオンがついているアシヨカピラーは印度の国章となっている。そのあと大菩提会の図書館に案内され、そこでジュースの接待があり、団長から団員の紹介と、日本から持って来た医薬品や仏画の御土産をあげて、交歓の一時を過ごした。そして午後六時半頃、サルナードをあとにベナレスのホテルに帰った。夜は、現在ベナレスヒンズー大学に、ヒンズー教の研究に來ている葛西夫妻と夕食を共にし語り合った。

十一月二十五日

今朝は六時半にベナレスの名物になっているガンジス河の水浴を見学に行った。朝は涼しすぎるのでセーターを着て出掛けた。一生に一度は、ベナレスに來て聖河の水で身を浄めることが、ヒンズー教徒の願いであるそうだ。全インドから來ているのだろう大変な群集であった。車を降りて河迄歩く途中は、乞

食とライ患者の群がおしよせ汚なさに満ちていた。そのうえ、物売りの掛け声や押売りが、うるさくついて来る。我々は、河の中に舟を出して見物した。ガンジスはバトナでみた時、美しく大きいと思ったが、ベナレスでは、聖河と云っても濁汚の水である。この水で信者は水浴したり顔を洗ったりする。またこの水を水瓶に入れて持ち帰る人もあるそうだ。バトナでみたと同じように、果物、野菜を前に置き、太陽に向いお祈りしている信者もいた。又、日除けの大きな傘をさして一家中でお祈りしている信者もいた。岸をはなれた背後をみると、全国の信者が泊っている建物や、ヒンズー教の寺院等、大きな建物が並んでいた。また河辺には、ヒンズー教の火葬場もある。ここは写真撮影を禁止している。ここで火葬がすむと、その灰をこのガンジス河に流すそうである。又、もう一つの河辺は洗濯場になっている。大勢の人が盛んに洗濯している。洗濯したものは、石の上で、たたいてからほしている。約一時間ガンジス河の水浴をみてホテルに帰った。朝食後、今日も夜七時迄自由行動である。町を見物に出掛け

たり、荷物の整理したり、手紙を書いたり、皆、自由に過していた。又、明日から、今度のは、ラクノウ迄、強行軍がつづく。宿泊、食事もある。夜七時に夕食後、車でベナレス駅に行き、夜行列車で、ゴラクプールに向け出発した。スリーピングバッグを持って乗り、車輛は、バトナから乗って來たのと同じ型のものである。我々の旅行は、このように割合うまく行ったのも、団長の木村先生と日本旅行会の橋本さんの努力の御蔭であり、そのうえ、カルカッタから、ラクノウ迄は、インドのマレーキョリートラベルサービスの副支配人のサガールさんが一緒に同行してくれたからだ。サガールさんは、あと一週間程したら、オリシピックの観光準備視察に日本航空の招待で日本に行くとか云っていた。この時間にルーズな印度で、割合時間どおり行動出來たのも、これらの方々の御蔭と感謝している。

正 僧 詮 義 釜 塩



高 橋 良 和

(中外日報取締役)

浄土宗の児童教化運動は、各宗のそれより一ばん古いのである。

明治の終りから、大正のはじめにかけて、東西で児童教化運動、主として日曜学校運動が盛んになったが、その関西の中心がこの塩釜義詮僧正であった。もちろんその頃は関東に、故人の鈴木積善氏をはじめとして、現在なお活躍中の鵜飼俊成、三輪寿雄などの各氏をはじめ、そのあとにつづいて今は名古屋にいる西村隆信(当時は野口姓)氏などがつづいてたのである。関西にはこの塩釜僧正と大阪の谷川順孝僧正を中心とする人たちが活躍したのであるが、その関係の人たちのことはあとにゆずるとして、塩釜僧正は、関大を出ると京都にかえってきて下京区下南町五条の上徳寺の住職となつて、フタバ会という子供会をつくったのが京都で一ばん古い日曜学校といえるのである。

塩釜僧正は若くして頭が禿げていたから、少くとも十五、六才ぐらいは年をとつてみられたらしいので、宗教大学を出て京都にかえってきたときには、すでに五十才ぐらいにみられたということである。晩年には年相当にみられたが、若くして髪の水の薄い人はどうもフケてみられて、五つや六つはむだ損をするのだから、塩釜僧正もその点ではエライ損をしたといえるのである。

この僧正はなかなか粋な方で、音楽でござれ、長唄でござれ、全く素人の域を脱していたから、つい京都のそうした方面でもなかなか人気があったのは間違いがない。

酒は好きというより愛したというのか、酒を友にしたというのか、とも角もあまり呑めないくせに手に盃をもつのが好きであって、つい宴会などでは二次会、三次会へと流れるのがとても多く、そうであるから寺にかえるのも午前になることがあるというので、あるところでは午前さま（御前さまの意）という敬名さえ奉っていたほどで、私の膝を枕にしてのうたたねなどは何十回あったかわからないほどである。

私の子供の仕事が今日あるのは、この僧正のおかげであって、昭和のはじめから亡くなる昭和二十三年のその日までその身边にあって絶えず指導をうけたものであった。

パイオリンの上手な僧正は、よく幼稚園のおゆうぎ会にパイオリンをひいて伴奏をされたものであったが、僧侶としては全くの異色で、一寸ケタはずれたアイデアを出してはそれをやりあげる腕前はたいしたものであって、今、知恩院に残っている華頂会館の建設も、華頂幼稚園の建築もこの僧正の計画であつたし、会館の裏に新館をつくって信徒宿泊所を建てたのもこの僧正の計画であつたのである。

今からみればなんともないことであるが、今から三十年も前には一寸考えつかないことであつたといえるのである。

その頃浄土宗の児童教化員養成所という児童教化の指導者養成の事業も東西に設置したり、全く子供の仕事に対する情熱はすばらしいものがあつた。

華頂会館前の法然上人幼時の勢至丸の銅像は、当時の浄土宗児童協会の主唱であるが、事実はこの塩釜僧正を中心とする仲間たちの力で出来たものといえるのである。

然しこの僧正はなかなか気が短かかったので、ときどき向う腹をたててよくどなられることがあつた。でも心のうちにはほんとうにやさしかったのだらう。その証拠にどなたあとでは必ずといってよいほど一ぱいのましてもらつたものである。

この法然上人鑽仰会の「浄土」が関西で最初にのびたのも塩釜僧正が今は故人の真野正順先生や、中村弁康上人などを迎えたことから出発したものであるから、浄土誌にとっても恩人の一人であつた筈である。

今まで生きておられたら、どんな仕事を残しただらうか、とに角京都には珍らしい存在であつた人である。

家康と登誉天室

鶴田湛泉

四

いよいよ軍を進めた信長は桶狭間に近づくと、五千の手兵を二手に分けて押し進んだが、義元の物見役の石川六左衛門の率いる待ち構えていた軍勢に遭遇し、先手の大将、佐々隼人助正通等三人は力戦奮闘したが、終に討たれてしまった。

これまでの度々の合戦に勝を得、今朝来既に鷺津丸根の織田方の両拠点を陥落させたのみか、今又先手の武将三名を軍神の血祭に挙げる事が出来た義元は、我鋭鋒には天魔破旬も齒が立つまいと欣笑を催し、信長など取

るに足らずと、唄えや舞えとばかり酒宴に打ち興じていた。

いかに精銳とはいえ僅か五千の小勢では、四万の大敵と正面切つての決戦は不可能と考へた信長は、義元の本陣の背後に廻つて不意に戦を仕かける以上良策はないと、旗を巻き締め、馬の轡を紙で巻いて嘶かぬようにし、兵には草摺、太刀音も立てぬよう深く用心させて、山の間道づたいに桶狭間の山の後を廻つて義元の陣營の背後に出ると、兵を山に隠して敵の油断を伺っていた。

明くれば廿日、昨夜半から降り始めた雨は車軸を流すような大雨となっていたが、今川

勢は、昨日来の酒宴に疲れ果てて大雨も知らぬげに死人のように酔い臥していた。

折から黒雲山を覆いかかり雷鳴山を振わし稲妻がひらめくと掃然たる豪雨、その上烈風唸り吹きまくり全く咫尺も乗ぜぬほどの闇となつて来た。

この初夏の大夕立を機に天祐なりとよろこんだ信長は、雨中に屹立して、

「それ者ども打ってかかれ」
採配高く打ち振った。

その声に応じて武具を備え鳴をひそめて山にひそんでいた信長の将士は、時こそ来たれと、突如旗を押し立て鼓を打ち鳴らして勇躍

躍り出た。中でも先陣の騎兵百余騎ばかり義元の帷幕目ざして驚進し、馬を乗り捨てると、一時にワッと喚声をあげて帷幕の中へ躍り込み突き入った。

まさかこの大雨ではと気をゆるし、敵への備えも怠っていた今川勢はこの急襲に、寝耳の水の驚きよりも甚だしく、義元始め近侍の将士は物の具つける暇もなくあわてふためいて打ち向った。四百の兵を擁していた義元ではあるが、緒戦から自ら佩刀を抜いて戦わねばならなかった。

最早や、四万の大軍と雖も問題ではなかった。驚愕し遁走し初めている兵は烏合の衆に等しかった。信長勢は、疾風迅雷の勢で敵の陣中を駆けめぐり当るを幸いに斬りまくった。この戦で織田勢が今川方の首級を挙げることに式千五百と称され、義元はあわれ天下制覇の夢も空しく、四十二才を一期として桶狭間の田楽の坪で、泥にまみれた首級を敵に渡しってしまった。

桶狭間の一戦こそ、若き廿八才の信長の武威を決定的なものとする結果となり、新しい勢力として天下の人の刮目するところとなっ

たのは云うまでもない。

五

義元に軍略を認められ敵に備えて大高城を守っていたため桶狭間の合戦に逢わなかったのは、家康にとっては果して幸であつたろうか。

桶狭間で義元を首尾よく討ち果すと、間髪を入れず勝に乗じた織田勢は、今川方の沓掛、池鯉鮒、笠寺の諸城をつぎつぎに囲んだ。今川勢は守備し切れず城を棄て将兵共に皆潰走してしまい、駿府も既に織田の勢力下になったと云う風説が、その日の中に早くも家康の家臣の耳に入った。予期もしなかった義元の敗戦に色を失い事態の急に驚いて、重臣の間で評議が行われた。これが事実なれば由々しきことである。信長が諸城を攻め落した軍勢をまとめて引きつれ、勝に乗じてこの城へ押しよせてくるは必定である。そうなれば一たんはたとえ手強く防戦しても、元来この大高城は敵地の中に孤立している上に、糧米は至って僅少で、尚寄手は勝手知った者共であるが、味方は土地の案内に暗い他国者ばかり

であるから所詮籠城は叶うまい。敵に帰路を遮断されぬ以前に、本国岡崎へ引き上げるここそ良策である。退路を切られては一大事である。一旦岡崎へ引き上げてさえいれば、本国まで寄せ来った織田勢いかに強敵でも、三河武士の面目にかけて戦へば恐るるに足らぬ。

と意見をまとめて家康に言上したのであつた。

家康は義元討死ときいて愕然としたが、強く自制して色を現わさず端然と坐してきき終ると、おもむろに

「かかる時こそ、流言の多いものである。或は敵方が間者を放って今川殿討たれたなどと浮説をまき散らすこともあろう。それ故、事実か否やをきき定めぬ間に、城を退いては、後で人の嘲を受けぬとも限らぬ。今暫くは静かに構えて、世上の風説の実否をよくきき定めて後、その上で策を計るべきである。もしその時に至って土民共蜂起して道を妨ぐならば、蹴散らして通るに何程のことがあるう。若し又、噂の通り今川殿討死され織田勢に囲まれたら、これは天命とも云うべきであ

る。その時こそ、この城を枕とし今川殿のた
め弔合戦をなし、いさぎよく討死するに何の
恐れがあるうぞ」

物に動ぜぬ鎮重な態度で家康にこう説かれ
ると、義理の通ったもつともな言葉に、重臣
等も一言もなく服せずにはいられなかった。

こんな決意を固めている時、外戚に当る刈
屋の城主、水野下野守信元の密使として、家
臣浅井六之助道忠が、家康の許に遣わされて
来た。

浅井は、信元の密旨をこう伝えた。

（今日昼頃、義元公が桶狭間で討死せら
れ、駿河勢は遺憾ながら総敗軍となっていし
まった。それ故に、織田の軍勢が道路を未だ塞
がぬうちに早く三河へ引き帰されよ。水野は
信玄、織田家の旗下として殿とは互に雌雄を
争わねばならぬ矛盾の間柄ではござるが、さ
すがに外戚という血縁を思つて、そのまま捨
て難く、かくは御注進に参つたものにござい
ます。日は早や暮れかけています。一刻
も御猶余はなりませぬ。道案内は、この六之
助が申し上げまする）

浅井の密旨の口上をきき終るや否や、家康

は

「浅井を捕えて、留め置け」

と命じた。家臣は、

「殿、何と仰せられまする」

意外な下知に驚いてきき返した。

「ウム、一室に閉ち籠めて置くのちや。た
だし、慇懃にな」

と付け加えた。浅井が引き立てられて行く
と、

「そのうち、味方の一信が来るであろう」

「ハッ」

家康の洩らした一言に、何かを期している
ことを知った家臣は、愁眉を開いた。

家康は何思つたのか、守備を更に固めさし
めた。

城のあちこちに旗印が建て増され、鐸火の
用意が数多なされた。それは、よし城を退去
するにしても、敵に感知されぬよう、あくま
で城中に楯籠る態度を土民共に示す必要があ
ったからであつた。

家康が、水野の使者を警戒したのも無理で
はなかつた。

信元は家康の母の弟ではあるが、刈屋の先

代の城主、水野忠政とは父広忠が敵として幾
度か戦を交えた仲であつた。当主の信元にし
ても、父の在世には父の広忠に敵意を持つて
いたのであつた。まして、信元が織田方に味
方したため、父が今川方をはばかって母を離
別した程の間柄であつた。

今も敵側の信長に属している信元から使わ
された密使である。

未だ事態の真偽さえ明らかでない現状であ
る。或は自分を売る計かも知れぬ。倉卒に城
をすてては敵の計に乗つて、あざむかれて天
下に笑をとるかも知れぬ。かかる時こそ要心
すべきである。たとい母の旧縁と云つても、
その心は計り難い。過信してはならぬ。そこ
には恐るべき陰謀、落し穴がかくされている
かも知れぬと疑うだけの余地がないでもなか
つた。

それは、家康の単なる猜疑だけではなかつ
た。生き残るためには、骨肉相食み、肉親互
いに殺傷をあえてしなければならぬのが、こ
の頃の乱世の常識でもあつたからである。

★

★

★

淡く清らかな

佐河田昌俊

林 左馬衛

(宮内庁図書寮)

あれは、いつのことだったろうか。ぼくと老和尚は、どこまでも続く大きな土手みたいな裏山のその下道を黙つて歩いていった。「一寸、ある。」と、いつたきり、和尚も喋らなかつたし、ぼくも問いかけることが躊躇されるのだった。

本当のところ、ぼくは少し当惑していた。ただそれだけのために来た——には違いなかつたが、この寺にしてはかなり多数の参観者と、某大学から「狂雲集」の写真撮影に来て

いる真面目な研究者をおいてきぼりにして老和尚が道案内を勤められたのは、紹介もなくただのこのこ出掛けてきた若い数奇者にすぎないぼくにとって、若干、重荷であつたようだ。

「ここには、音阿弥の墓がある。最近まで橋岡さんだけが、墓参をかかさなかった。ここ数年会っていないが、あの人も年をとつたことであるし……。わたしは、橋岡という人は、偉い人だと思う。なかなか、できないことです。」——ぼくの知らない能の世界の話であつたが、和尚の心の中で、ぼくは、橋岡さんと同格に扱われてしまつていたようだ。「それにしても、佐河田喜六の墓をきいてきたのは、貴方がはじめてだ。」そう和尚はいつた。

日がかげり、やがて明るくなるうちに、ふと、山腹をひらいた墓域があつた。それが、佐河田家の墓所であつたこと、今は、無縁に放棄されていること、墓所のほぼ正面に立つ巨大な碑文の文字は羅山林信勝の撰文になり、かの備後福山藩の儒者五弓久文の事実文編に収録されていること、等々を、ぼそぼそ

語りながら、老和尚は、碑文の文字を、冒頭の部分から、声に出して読み上げていこうとした。ふりあおぎ、かがみこみしながら、一字も読み余さないように、とつとつと読み上げてゆく和尚の姿に、ぼくは、卒直な感動を禁じえなかつた。その読みは、きわめて稀にきくことができる、典型的な素読であつた。

和尚は、時々、つまつた。それは、欠損した文字を思い出そうとする時だつた。それはどんな読経にもまして、真摯な僧の姿だつた。で——、ぼくも、参加せざるを得なかつたし、なにしろ長い碑文なので、相当、時間をくつた。とにかく、これ以上は、参考書を持たずにきた二人の力では駄目だということが分るまで、やってみて、われわれの行事が終了した後、和尚は、碑面を離れて、自分が聞いてきたところによると、その斜前方にあるのが昌俊の墓だ、と教えてくれた。

それは、妙な位置にあつた——、と思う。墓と碑石との位置のバランスが、奇妙に感じられる程度に意表に出てきているのだが、たしかに、他の墓は、年代が若すぎることに続いて、問題にならなかつた。

墓が奇妙な位置にみえるのは、その自然石の墓の姿が、近世の墓としては墓域に比してやや小振りにすぎるせいもある。碑のあり方が堂々としてみえるのは、たしかに、その大ききさだけによるのではなくて、墓域の中の正当な位置に正当な空間を占めているからである。そうしてみると、この墓域のこの部分にことさらに墓の位置を卜した、昌俊、もしくはその供養者の感覚が、うなずけないようでもある。

ほくらは、その墓の前後に、しやがみこんだ。——これが、永井信濃守尚政の懐刀として、石川丈山や林羅山や小堀遠州の莫逆の友として、近世茶道史上に重きをなし、里村昌琢をして当代連歌界の名人と評せしめ、飛鳥井雅庸を通じて、その作歌「吉野山花サク比ハ朝ナ朝ナ心ニカカルミネノ白雲」を後陽成院の記憶の底ふかくしのばしめた、かの壺斎佐河田喜六昌俊の唯一の遺跡なのだ。

「何か書いてあるでしようか。」

と、ほくがいうと、

「さあ。」

と、和尚が云った。

実際、老和尚は、それについてお考えになったことがなかったものか、ほくの提案と同時に関に身を屈して、この苔むした自然石の具合を、丹念に検討されるのであった。もちろん、ほくも参加して、この石の表裏をくまなく調べてみた。そして、正面に「是甚麼」と彫ってあるのが分り、また、それだけしかない、ということが分った。

「シー・シェンマ（これはいったいなんだろう）——と読むんですよ。きっと。これはすごい墓だな。おそらく、史上一つしかない徹低した墓ですよ、これは。」

ほくの高揚した発言は、老和尚にとってやや不可解であったようだ。否定はしなかったけれども、首をかしげて、一寸考えておられるようだった。そして、おずおずと、しかし、はっきりした口跡を残して、

「これなんぞ。」

と、いわれた。

「いや、あの連中は、漢文を棒読みに味わっていたように、ほくは思うのですよ。その長い体験から選ばれた言葉が、これだったんだ。」

しかし、和尚は、もう一度繰かえして、今度は力強く、

「これなんぞ。」

と、いった。自分にもいいきかせ、ほくにもきかせ、そして、われわれの読みとして結論づけよう——というほどの語気を、ほくは感じた。

ニュアンスの違いこそあったが、われわれが佐河田について交しえた諦念は、一致したように、思われた。

「小堀遠州の周辺を考えてゆくと、彼らがきずきえた文化の中心部に、ずっと影をさしてきえてゆくような、かすかな清らかさがみとめられるように、ほくには思えてならないのです。実際、彼らは、その後世に残した作品がしばしば訴えてくるほど高尚な人間達じゃない。だから、それが一体何であるのか、まだよく分らないのだけれど、調べれば調べるほどこてこてしていやらしくみえてくる彼らの生命を不思議に救っているなにかがあることを、否定できない。それをつきつめて考えてみると、なにか、この文化を深い所から肯定していた人格みたいなものが存在したよ

うな気がしてくるその謎を握った男として、
ほくは、このところ、佐河田喜六のことを考
えてきたのです。佐河田には、光悦とか、遠
州とか、丈山とか、から感じとれない、あわ
い清らかなものが、かすかにしかし純粋に湛
えられていたような気がするんですよ。墓を
みて、ほくは、その感じを、もっと深く、信
ずるようになりました。」

帰路——、ほくは、ほくなりの感動を和尚
にわかつために、このようなことを少しずつ
饒舌になりながら喋り続けた。

「いや、丈山は、線が太い。方丈に額が掛
っているからごらんなさい。文もいい。」

老和尚は時々、自説を主張して、ほくの思
いすごしをたしなめられながら、それでも、
愉快そうに、自分も、佐河田が好きだ、自分
としても、長年ずいぶん色々な人にそれを話
してみたが、同感してくれる人がいなかった
た、第一、佐河田昌俊という人のことを知っ
ている人がいないのは、残念なことだ、とい
った。

それから数年たって、ほくは、もと水戸の
徳川家に伝来し、昭和初年の売立てに出て以

来消息を絶った、すぐれた志野茶盃を目睹す
る機会を得た。入札目録にも指示してあるよ

うに、この茶盃には、佐河田喜六の箱書きが
ある。箱底の高台跡が示すごとく、まごうか
たなき共箱であった。それは、近世初頭の茶
器にみなぎる一種の感覚を秘めた、絵志野の
盃だった。佐河田喜六自体が近來有名でなか
ったためと、その後、良家の蔵深く秘められ
て人目にふれられなかったためとあって、一
向に名盃扱いされたこともきかないが、きり
りとひきしまった手ずれの跡を残さぬこの盃
体が、審美的にみても、同類の存残例に乏し
い点からみても、桃山時代志野の優品にどれ
ほどおとるものとも考えられなかった。この
手のものの破片の出どころを確かめたわけで
もなく、他に傍証すべき豊富な類例をみてい
るわけでもないから、断定するわけにはいか
ないが、もし、志野茶盃に遠州好みの斬新な
気分が加えられたものがあるとするならば、
これ以外に基準を見出し難いものではあるまい
か、という程の即物的な説得力があった。

あるいは、昌俊に、彼なりに好みを追求す
ることを許された志野窯があつて、美のなに

ものであるかを問うことがあったものなので
あろうか。

人生の数奇は、往々にして、自分の最も愛
するものを問いつめる機会を、見失わせるも
のであるらしい。ほくと佐河田の関係も、こ
の二回の偶然にも似た出会いをのぞいて、つ
いに、発展しおおせることがなかった。

ほくは、その後、薪の里を訪れたことがな
い。それは、訪れなければならないもう一つ
の強力な理由が、待っても探しても、いつこ
うに出てこなかったからに外ならない。ある
いは、このまま、光をみずに終ってしまうの
かもしれぬし、遠い将来に、その最後の出
会いが予定されているのかもしれない。墓石
の位置から、ふと私は突き離されたように思
った。あの時の違和感が、あるいは、始めて
であり同時に終りである物事の全体像を示し
ていたのかもしれないという気がしないでは
ない。「これなんぞ。」ほくは、人生という
ものは、そうしたものではないのか、そして、
学問なども、そうした人生に浮ぶ一つの仮象
としての宿命を免れえないものではないのか
と、このころは考えるようになっていた。

南無阿弥陀仏

という「ことば」について

福 富 海 岳

(唐津市浄泰寺)

「ことば」はこの世の中に存在するすべてのものとともにあって、自然に発芽し開花してことばとなり、そのものの存在する意義を深め内容をゆたかにし、人生を平和幸福へと導き育てて呉れるものと思います。ただし時には対立抗争を意味し、或は破かい戦争を意味することもあります。人生の終局の目的が平和、繁栄、幸福にあります以上、ことばもまた終局において人生を育て導いて平和、幸福、繁栄にいたらしめるものと考えなければなりません。キリスト教の「ヨハネによる福音書」に、

「初めに言^{ことば}があった。言は神と共にあった。すべてのものはこれによってできた。」

とあります。キリスト教の神は創造神ですから、ことばもまた神の創造ということになるのでありましょう。「南無阿弥陀仏」ということばは決して仏の創造されたものではなく、「さとり」であり、さとりによって明かになったものがあります。念仏門の元祖法然上人に次の如きおことばがあります。

「法爾の道理といふことあり。ほのほは空にのぼり、水は、くだりさまにながる。菓子(果物)の中に、すき物あり、あまき物あり、これらは、みな法爾の道理なり。阿弥陀仏の本願は、名号をもて、罪惡の衆生を、みちびかんと、ちかひ給ひたれば、ただ一向に念仏だに申せば、仏の来迎は、法爾の道理にて、うたがひない。」(勅修御伝第二十一)

と、極めて明瞭に断言されています。しかもほのおは空にのぼり、水はくだりさまにながれ、菓子の中にすきものあり、あまきものありと同じように、法蔵菩薩の存在も、ご本願も、南無阿弥陀仏ともに法爾の道理であるとされているところに非常に意義深いものがあります。ですから法蔵菩薩というのは決して架空の存在ではなく、涅槃經に「一切衆生に悉く仏性あり」とする仏種性の自然の発芽であり成長であります。仏性とは詳しくは仏種性と見るべきであ

って、種なく性のみあることは法爾の道理として法蔵菩薩あり本願ある所以ではありません。従って「南無阿弥陀仏」という「ことば」には本質的に自然に一切衆生悉くが必ず救われなければならぬもののすべてが内在しているのです。

酒は酒であって決して水ではありません。それで水を飲んで酔う人はありませんが、酒を飲めば必ず酔います。お念仏は法蔵菩薩のご本願成就のおことばであり、「さとり」であって決して単なる人間の言葉ではありません。単なる人間の言葉だけでは一切衆生悉くを救うことはできませんが、念仏すれば必ず往生し救われることができます。宗祖は、

往生はよにやすけれどみな人の

まことのころなくてこそせね

と仰せになっています。お念仏を唱えることはすべての人の自然であり、法爾の道理ですから、往生ということは極めて簡単でありたやすいことなのです。すでにご本願は成就され、十方衆生はみな悉く阿弥陀仏さまの大智大悲の中にあるのですから、ただ「信」一つがこれを決定するだけであります。阿弥陀さまの光明はいま現に十方世界を照らしているのです。ですから十方衆生は間違なく、その大智大悲の光明の中にあります。そして常に育てられ導かれているのですから「信」あることもまた自然であり、法爾の道理でなくてはな

りません。従って念仏すれば自然に「信眼」が開かれてまいります。一枚起請文に「ただ一向に念仏すべし」とあるとおりであります。信眼が開かれるれば「信耳」も「信口」も「信鼻」も自から発達し成長し開かれてまいります。

すなわち「南無」とは十方衆生であり、「阿弥陀」とは法爾の道理であり無限の大智大悲大光明であり、「仏」はその体現者であります。ですから「南無」と「阿弥陀」と「仏」とは三者決して別々ではなく、「南無阿弥陀」という「ことば」の中に私たちの過去も現在も未来もそのすべてがこもっていて、真実に生き成長しているのであります。そして時々刻々に私たちが「いま何を如何にして為すべきか」を正しく決定し、実践に導いているのであります。「選択集」第三章に、

「念仏はこれ万徳の帰する所なればなり。然れば則ち弥陀一仏に、あらゆる四智、三身、十力、四無畏等の、一切の内証の功德、相好、光明、説法、利生等の、一切の外用の功德、皆悉く阿弥陀仏の名号の中に摂在。」

とあります。お念仏を唱えることによって少しの間違なく「いま何を如何にして為すべきか」かを決定し、着実に実践することのできる所以でありまして、世界の人類のすべてが民主主義を實踐し、必ず平和、繁栄、幸福にいたることのできる途であると存じます。

無 仰者の疑問

中野 尅子

(誌「一味」主筆)

も、一切の邪惡を一度に無くして、平等に一遍に救って了つたらどうだ。救われた者や、まだ救われぬ者があつて差別があると云うのは、絶対者とは思われぬ。

○私は神仏が無くても困らぬ。

病氣が有るのも、死の有るのも自然であつて、現在の科学の力や、文化の程度では、不幸や社会の欠陥のあるのは己むを得ぬ。欠陥があるから、人間性や社会性を高めて、より良き世界を建設せんと、永遠に欲求し、研究努力する事が吾々の宗教だ。

○信仰とは、神や仏を祭つて、其の神様や仏様へ、死んでから極楽へ入れて貰ふことや、生きて居る内に金儲けをさして貰つたり、病氣が治つたり、縁談や入学が契つて、様々な御利益が沢山あるように、お願いする事のようになつて居るが、それが「信仰」だとは私は思わぬ。

○仏様や神様へ、無理に契わぬ事を願うのも無茶なら、そんな事をいと平氣に諾いて下さる神仏も不合理だ。信じたり、願つたりする者へは御守護や冥加があり、信じない者や、背く者には罰やお咎めがあるとは、人間と余り質に於て変らぬ暴君のようだ。

それより、悪人も、罪人も、病氣も死も、貧も不幸も天災

○安産を願つたり、病氣平癒の御祈禱したり、戦勝祈願、五穀豊饒等の大護摩や修法をしたり。お祓いや、お札、お守などで助けられたいとか、地鎮祭や落成式、進水式や開所式、結婚式や葬式等に色々神様や仏様の御力を借りんならぬとか、お経や祝詞を上げて貰わねばいかぬとは思わぬ。無智と無氣力から、昔は幽霊や極楽が有るように思ったように、無意味な宗教の形骸や、煩悩な因襲は、益々世の中を混乱に陥とし入れたり、無駄を行なわしめるだけだ。戦争中、日参や大祈願会を何回もしたのに、八百万の神々がついて居ても日本が敗戦したから、幻滅の悲哀を感じ、矛盾に悩んで、虚脱状態に長く陥入つて居たように。間違つた宗教思想や行事は、寧ろ社会悪で、文化を低くめる。

○結婚式はやっても離婚式までやる者は無い、神仏の力で結婚出来たものなら、神仏の力でなくては離婚は出来ぬ筈なのに、それをする者はない。それじゃ初めから神や仏を使わなくても良かったのじゃないか。葬式だってそうだ。追善の読経や回向、法事や法要、祭礼や神事一切要らぬ。

○神社や教会、お寺や新興宗教の本部本山寺で巨大な建築をして、龐大な金額を消費し、或は神事や儀式で数億の金を動かすが、それが社会的に文化的にどれだけプラスになって居るか、寧ろ迷信の助長になって居る位だ。一般民衆が何かなしに「旧き宗教」を嫌い、そのものに意義を認めず、適確な合理的な効果を認めず、無駄と消耗の余りに多き事を知って、信用を持たず、飽きを感じて来た。

○宗教側から現代人には信仰がない、社会には宗教性が無いと云うが、吾々には今のような宗教を押し付けられる事は迷惑だ。必要がない。時勢おくれのネキ物を持ち廻って、買え買えと云うのでは、買わぬ者が悪いか、買わせようとする人が悪いか。そこをよく考えて貰いたい。教導者であつたら、二歩も三歩も先じて居らねばならぬ。自分にもハツキリ信じて居らぬ神や仏を担ぎ廻って、売り広めようと民衆は取り合わぬ。

○教会は献金で保って居り、寺院は寺の収入だけで立ち行く

のは一割か二割、多くは他の稼ぎで喰い、新興宗教は、宗教に素人の者ばかり駆り集めて、搾取で太って居る。現代人の血となり、社会の生命となり得ぬ宗教は、太陽の前に朝霧の如く消えて行く。舟べり叩いていくら呼んで居ても「狸の泥舟」は、間もなく沈没して逝く。目前の事だ。

○——此の無宗教者の声はその儘三千年昔の釈尊の叫びだ。釈尊はあらゆる既成の宗教に救われる事なくして、菩提樹下に不解坐を結び、一七日を満じて悟ったものは、天地は一切「仏意」によって輝き、「仏力」によって活動して居る。一微塵と雖も無駄なものもない、無意義なものもない。皆「仏行」を行じ、「仏土」を建設せんとして居るものばかりである。

だから私達の一挙手、一投足も、仏子の自覚を以て四六時中、精進又精進、己れの本分を尽して、浄仏国土、成就衆生に邁進せねばならぬ。万人宗教、時処位に於て、「仏の自覚」を顕現せねばならぬ。



信仰の手びき

浄土三部経ものがたり (一)



宮 林 昭 彦

(大正大学助教授)

現代のわたしどもが、お釈迦さまのみ教えを直接にうかがうのは、その遺された經典によるほか道はありません。しかし、八万四千の法門といわれる龐大な經典を、あまねく読んで理解することは、なかなか困難なことであります。そうすると、わたしどもは、お釈迦さまの説かれた限りない經典の中で、最も真実をあらわしていると共に、もう一つ大切なことは、末法澆季(ぎようき)といわれる現代に生きる、このわたしどもが救っていただけの内容と価値をもっているみ教えを、選ばねばならないと思います。実は、その願いがかなえられている經典に、浄土三部経があります。

これから信仰の手びきのために、浄土三部経のあらすじをお話いたします。

○ お釈迦さまの在世時代、インドは十六の国にわかれています。ところが、大体の形勢からみますと、ガンジス河の南の王舎城を首都とするマカダ国と、ガンジス河の北、舍衛城を首都としたコーサラ国との二大陣営に対立しており、ほかの国々は、この二大強国を中心にれい属的な存在であったのです。

三部経の第一の無量寿経は、この王舎城を囲む五山のうちの一つであり、都の東の方にそびえている、耆闍崛山(ぎしやくくせん)において説かれたものであります。

第二の觀無量寿経は、時のマカダ国王、頻婆娑羅(びんば

しゃら」と、王妃、韋提希（いだいけ）の王子である阿闍世太子（あじゃせたいし）が、提婆（だいば）にそそのかされて、父母を幽閉した悲劇を縁として、その悲劇の場所で、悲劇の主人公である韋提希夫人にむかって説法されたものであります。

つぎに第三の阿弥陀経は、まえの二経が、王舎城を舞台としているのに対して、北のコーサラ国の舎郷城を中心に、その城外にある祇園精舎（ぎおんしょうじゃ）における説法をものがたっております。

○

まず、無量寿経についてお話をいたしましょう。

きょうも、お釈迦さまの説法を聞こうとする人達で、丘の上はうずめつくされていました。多くのすぐれた比丘たちをはじめとして、お釈迦さまのお弟子たちが一万二千人、そのほか遠く近くから、みおしえを聞こうとする信者たちをかぞえと大変な数の人びとのあつまりでありました。今やおそしと、お釈迦さまの出座を待ちこがれていた人びとが、そこにお立ちになられたお釈迦さまを仰いだとき、きょうのお釈迦さまは、身も心も悦びにあふれ、尊高にして高潔なこと、あたかも明浄鏡が、ものの裏まで映しとるほどの澄みきりか

たでありました。いつもお側でおつかえ申しあげている阿難尊者でさえ、「いまだかつて、殊妙なること、今のごとくなるを瞻都せず」と驚歎してしまったほどの気高さでありました。尊高かぎりないこの瑞相に、三世十方の諸仏までが、襟をただし、いまやまさに思念をめぐらしておられるお釈迦さまに対して、人びとは、一体いまから、何が説かれるのであらうかと、固唾をのんで緊張しておりました。

そのような刹那の緊張をやぶって説かれていくのが、この無量寿経であります。開口一番に発せられた言葉は

「如来はかぎりない大悲をもって、人びと有情をあわれみいつくしむ。如来が今の世に姿を得たゆえんは、今まで説きおわった諸の教をもって、人びと有情を教化し、最後に今や開説されんとする教によって、一切の人びと有情をして、漏れなく、真実の救いにあずからしめんがためである」

という宣言でありました。

この経を手がかりとして、宗教を形成していった多くの人びは、お釈迦さまのこの瑞相と名乗りをもとにして、この経こそが、仏一代の説法中、最上究竟であることを、みずから表白されたものであると述べています。

○

このようにして、この經典を見なおしてみますと、わたしどもは、驚くべきことを発見するのです。それは、今日ここにあつまった聚衆の人柄について、出家の比丘たちについては「一切大聖にして神通すでに達せり」といい、在家の信者の人びとに関しては「みた普賢大士の徳に遵う」と云われていることです。「大聖にして神通すでに達せり」というのは出家の比丘たちは、今まですでに説かれたみ仏の教化によって、すでにみ仏とおなじ悟りに達していると云うことであり、「みな普賢大士の徳にしたがう」と云うことは、今日参集の在家の人びとも、すでにみ仏の教化に浴しているのか、かれらの今日の在家の生活は、み仏の慈悲を實行している姿である、と云うのであります。云いかえますと、ここに集っているすべての人びとは、いままでのみ仏の説法については、すでに卒業の資格をもった人びとであると云うのです。

このような聴衆が、お釈迦さまに向って、いまや遅しとその説法をお待ちしていることと、そして、いままさに、これから説かんとする法を思念して、威神きわまりない瑞相を顕現して、聴衆に対しての未曾有のお釈迦さまとの、この全体の光景におもいをよせますとき、今までにない驚天倒地のことがおこるであろうと云うことは、誰にでも予想されてくるはずであります。

そして、開口第一の宣言が、弥陀法こそが如来の出世の本懷である、と宣言されたのです。八万四千の法門を会得したかれらに、それは弥陀法への入門であると知らされたのですから、まさに驚天倒地であつたとおもわれます。

弥陀法とは、有限なお釈迦さまが、無限なる阿弥陀さまこそが、み仏の眞実相であることを開示されたことであります。お釈迦さまのまえに立って、眞実を完成したと考えていた人びとが、阿弥陀さまのまえに立たしめられることによって、五道流転の身にすぎなかったことに、気づかしめられることであります。微塵といえども、自己がまじっているものには、眞実の救いはありえない。眞実の救いは、如来を坐とすることにおいてのみかがやくのです。如来を坐とすることにおいてのみかがやく救いであるが故に、いかなる極無悪人といえども、この救いから漏れるはずがない、というのが弥陀法であり、お釈迦さまが、本当に説きあかされたかったことなのであります。

善は救われ、悪は見すてられるというのが、今までの説法でありましたから、この飛躍は、まさに云いようのない驚きでありました。このことわりを諄々と説きしめられたのが、無量寿経であります。

現在、わたしどもが用いております無量寿経は、上下二巻よりできています。上巻は、如来浄土の因果を説き、下巻は、衆生往生の因果が説かれている、とみる事ができますよう。

と申しますのは、上巻では、下巻で、一切衆生がもれなく救われていく理由、根拠、原理が示されているので、それが、法蔵菩薩の願行、すなわち如来浄土の因果というかたちで説かれています。一切衆生の、生死勤苦の根本をぬきとるという願いをみたすために、兆載永劫の修行をやりとげ、（如来浄土の因）、一切衆生を迎えとる浄土を建立した（如来浄土の果）ということは、法蔵の願行のなかに、一切衆生の迷いの因果がうちやぶられて、一切衆生の悟りの因果が建立された、と云うことであります。經典には、「諸の衆生をして功德成就せしむ」と説かれております。人間であられたお釈迦さまは、自己の苦集滅道をさとって、お悟りを開き、人びとにも、またそうすることをおすすめになされたのですが、法蔵菩薩は、また人びとの分までおさとりになられたのであります。

お釈迦さまが、法蔵菩薩において、さらに偉大な自己を発見したということは、そのことであり、それこそ、真実の自己であるとして、開顯していったのが、上巻の趣旨であります。

す。そうしますと如来浄土の因果といっても、衆生をきりはなしたのではなく、一切が衆生のためのもの、衆生をふくめての如来の因果といえましょう。下巻に説かれているところの衆生往生の因果というのは、如来浄土の因果がすでに衆生往生の因果を全うしたものでありますから、衆生往生の因果は、如来浄土の因果をはなれては存在しえないこととなります。下巻では衆生往生の因として、「名号のいわれを聞いて信じ歎ぶばかりただそれだけ」であると云われています。

「名号のいわれ」とは、上巻の如来浄土の因果の中に、衆生の往生が約束されていること、法蔵菩薩の願行の中に、一切衆生の迷いの因果がうちやぶられ、悟りの因果が建立されていることであります。「聞いて信ずる」とは成就された法蔵の願行が、一切の衆生に「諸の衆生をして功德成就せしむ」とあたえられたことであります。云いかえますと法蔵菩薩の願行が衆生に印現するといってもよいのです。ですからこの信には、微塵にも自己をまじえないものであって、衆生における如来のひとりばたらきであります。衆生往生の因といわれるものが、すでに法蔵菩薩によって成就せられたものでありますから、その果が、法蔵が成就した果と同一であることは云うまでもないでありましょう。それが浄土の世界であり、浄土のさとりとして説きひろげられているのであります。

「法語をいただく」

世間のいとなみひまなければこそ、念仏の行をば修すべけれ、そのゆへは男女貴賤、行住坐臥をえらばず、時処諸縁を論ぜず。是を修するにかたしとせず。

（念仏往生義）

あみださまはお念仏を申す者を一人残らず極楽に往生させるとお誓いになっていますが、こうした仏さまのお慈悲を少しでも疑う心があつては、いかにお念仏を申しても救われません。例えばある人は、

「なに一つ善いことをしていないことは自分がよく知っている。このような罪深い者がどうして往生させてもらえるだろうか」

と思つたりします。またある人は

「自分としてはつとめてお念仏を申しているが、まだ真剣さが足りないし、少しもきびしさが無い。こんな程度のお念仏では、とても往生できると思えない」

と諦めてしまいます。またある人は

「お念仏を申したいとは思ふのだが、何しろ毎日の仕事に忙しく用務に追われ続けて仲々申せない。こんなでは往生は無理である」と疑つてしまいます。

このような人々に対して法然上人は、その疑いが間違いであることを説かれました。

初めの疑いに対しては、病氣が重いからこそ良薬を用いるのと同じように、罪障がおもいからこそお念仏を修して無上の功德を得ようとするのであるといわれました。もし善根の多い人ならお念仏を申さずともよいわけであるというのです。

次の疑問については、何事もなすにも最初から満足のできることができる道理がないではないか、もし満足できないからといって、最初から何もしないままではいられない、一体どうなるだろうか。真剣さが足りぬと反省したとしたら、それは更に進歩しようとする心があるからに外ならない。ただただお念仏を申ししていれば自然と功をつみ、徳を重ねることになるので、その内に心から満足できるお念仏が申せるようになるといわれました。

そしてその次の疑問に対しては毎日忙しく生業の用務に追われているからこそ、お念仏を申すのだといわれました。

普通にはこれを逆にして、とても忙しくてお念仏を申して等いられないという者が多いのです。いま生きてゆくための用事が先きであつて、外のことをする。暇がないと口ぐせのようにいう人があります。それならもし生活に余裕ができたならお念仏を申すかというのにこのような人は決してお念仏を申さず、ただ人生を空費するに過ぎないでしょう。

毎日が忙しいからこそお念仏を申すのです。何故ならお念仏は誰にでもできる唯一の修行です。往來を歩いていても、家に暮していても、坐つていても臥していても、いつでも修行できる法門です。他の法門には出家しなければできない修行があります。学徳共に偉れていなければ修行できない法門があります。しかしお念仏は誰にでも申せます。それなのに忙しいからできぬという人があるとすれば、それは「詮ずるところ無道心のいたすところ也」であります。

編集後記

▽日本人の仏教への関心は根深い。仏教については多少の知識もある。その中の何れかの人は漠然としたものであるかもしれないが信仰を抱いている。しかし、さてその信仰の実践となると実行している人は少ない。これが今日の仏教の実状であろう。こうした状態の原因には、大方の人が信仰を実践してみたいと望んでも何処でどうやって実践がしたらよいのか方法がわからずまた機会もないというところが災いしている場合もあるに違いない。

真の信仰の裏の熱する機縁に恵まれない人もある。機会と方法を与えることは寺院住職方の務めであると思えます。

▽十一月号では、「浄土信仰と実践」の特集を試みま

した。信仰を実践する機会と場を広く開放している教界内の運動の二・三の例をお伝えします。御期待下さい。

▽東京の水鏡は、今までにない大騒ぎとなった。天の恵みで、何とかなつたものの、こんな時に、水の有様をしっかりと感じ、日常大切にしたいものである。

▽大正大学の学生六十六名が、今年は知恩院で実践仏教をした。読者の中ながらなかなかの努力で、評判がよかった。次代を担う人々だけに、たのもしい限りであった。

▽清浄院の法主石橋誠道上人は、八十七才の御高齢ながら、なかなかの御元気で、仏大の実践仏教を励ましておられた。雑誌浄土について、「もっと、易しくならぬかね。そして、一万部ほど売りなさい」ときつい言葉を頂いた。

▽京都、洛西、粟生野にある光明寺は、法然上人が火葬にせられた聖地である。始めてその聖地を訪れた編集子は、感慨無量であつた。信仰の炎は、身近に祖師を感得することより始まると言えよう。

▽笠寺縁起を書いて頂いた大村先生は、東京学芸大の教授である。大村雄峰先生の遺志をついで、大活羅中である。

▽高橋良和先生の交名録は、できるだけ写真を入れて故人を偲んでもらっている。大衆好評であるが、これが縁で、読者になつてもう人が多いことは、有難い。

▽十月はお十夜の月である。浄土宗では特に大切な行事であり、全国各地の寺院に於て夫々、お十夜が営まれる。読者の皆様方の地方で行われているお十夜の様子等、是非お知らせ下さい。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一カ年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 十月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十九年九月廿五日 印刷

昭和三十九年十月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田町一ノ廿二

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

郵便東京八二一八七番

宗教科教育の好テキスト

マレット著

竹中信常訳

A5版
定価 二五〇円
価 一八五〇円
一〇〇〇円

(但し都内は五〇円)

宗教と呪術

——比較宗教学入門——

人間存在の根底に横たわる「宗教と呪術」の問題を解明し、宗教の真実の在り方を鮮明した宗教学の名著を、訳者十数年の刻身のほん訳。

東京都文京区大塚窪町二四

発行所 誠信書房

振・東京・一〇二九五

日本一の生産・設備

梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響 理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展 参事 香取正彦先生
芸術院賞受賞



鑄物師 老子次右衛門

株式会社

老子

子

製

作

所

富山県高岡市横田 電話 (2) 0258. 1341